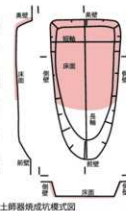


＜土師器生産の変遷＞

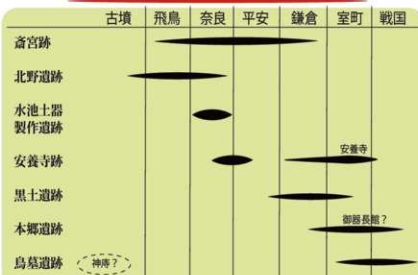
土師器生産に関わる「粘土採掘」、「成形」、「焼成」などのさまざまな工程の中で、焼成に関わる遺構について、明和町周辺で見つかった奈良時代の遺構には平面プランが「二等辺三角形」状を呈する特徴があることが指摘されてきました。一方、平安時代以降の土師器焼成坑がどのような形状を呈するのかは、発掘調査の事例が少なく不明な点が多くありました。しかし、本郷遺跡で見つかった土師器焼成坑は出土した土師器の特徴から平安時代に属するものと考えられ、少なくとも平安時代前期頃までは、奈良時代の特徴的な平面プランを継承している可能性があります。今回の発見は、有爾郷エリアで連続と続けられてきた土師器生産の実態を探る上で貴重な発見だといえます。



土師器焼成坑の平面プランの変化 S=1/200



～主要な遺跡の消長～



安養寺跡の発掘調査では、安養寺が造営される13世紀以前の奈良時代から平安時代の集落が確認されています。須恵器の硯や緑釉陶器などもわずかですが出土しており、有爾郷の中心的な場所だった可能性もあります。

明和町文化財解説シート

明星地区の古代の暮らし～上野、本郷、下有爾～

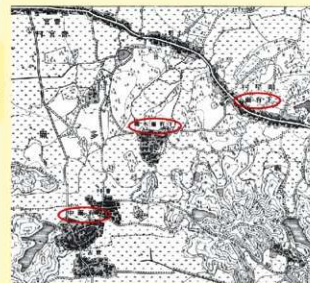


＜地名に残された土地の歴史＞

明和町には、古代において北部に「麻績郷」、中央部に「多気郷」、南部に「有爾郷」が存在していたと比定されています。町域南部に比定されている「有爾郷」に関わる地名として、「有爾中」や「下有爾」が現在もみられます。

有爾郷比定エリアの考古学的な特徴として、これまでの発掘調査の成果から土師器生産に関わる遺構が集中することが分かっています。

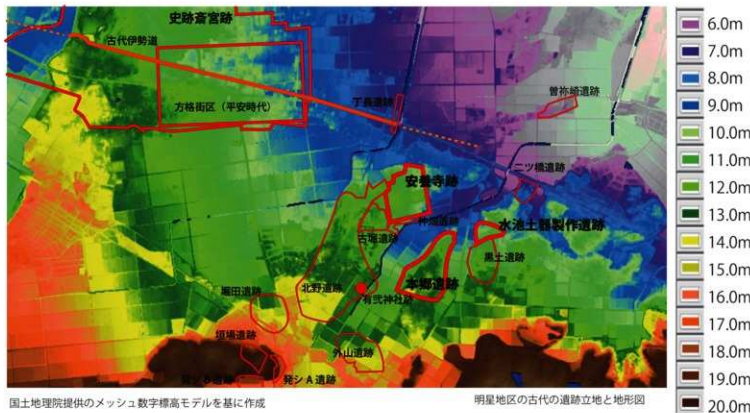
大日本帝国陸地測量部測量
（明治25年）「田丸町」の一部
「下有爾」、「下有爾本郷」、「有爾中」
の表記が見られる



＜地形と遺跡の関係性＞

町内に所在する遺跡の内、明星地区の古代に関わる遺跡の位置と地形を重ね合わせると、遺跡の立地の特徴がよくわかります。町南部の玉城丘陵を起点として、明野原台地と呼ばれる高位段丘面（明野段丘面）の微高地上の比較的安定した土地に遺跡が連なっていることが読み取れます。

＜平安時代前期＞（9世紀前半）



本郷遺跡発掘調査（第8次）

調査原因：団地造成 調査面積：約450m²

発掘調査：平成30年（2018）8月8日～11月30日、平成31年2月15日

◆平安時代前期の土師器焼成坑が初めて確認されたほか、掘立柱建物の柱穴が確認されました。建物は南西―北東方向に主軸を持つと考えられますが、全体は明らかになりませんでした。灰白色や黄灰色の粘土を選別して、穴の中に貯蔵している状況も確認でき、土器作りに関する施設がまとまっていたと考えられます。また、鎌倉～室町時代の溝が南東―北西方向に掘りこまれ、中世本郷集落の北東端にあたると思われます。



<土師器（杯）の変化>

本郷遺跡の土師器焼成坑2から出土した杯（土師器）には、底部外面にケズリ調整が見られず、ユビオサエ調製の痕が見られ、全体的な器形の特徴から平安時代前期（斎宮跡編年Ⅱ-1～2）頃と考えられます。

